

3.上狛北遺跡第1次・柳田遺跡発掘調査報告

1. はじめに

この発掘調査は、主要地方道上狛城陽線の建設工事に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。上狛北遺跡・柳田遺跡とも木津川右岸の沖積地に位置し、調査前の現況は水田であった。両遺跡とも土師器や須恵器、瓦などが表採されており、遺物散布地として周知されていた。

今回、両遺跡を南北に縦断して、主要地方道上狛城陽線が計画されたことから調査に至ったもので、両遺跡ともはじめての調査である。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会、木津川市教育委員会のご指導・ご協力を得た。記して感謝したい。当報告は筒井が執筆した。なお、本報告記載の国土座標値については、日本測地系を用いた。調査にかかる経費は、全額、京都府建設交通部が負担した。本報告は筒井が執筆した。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課主幹調査第3係長事務取扱 石井清司

同 専門調査員 竹井治雄

同 調査員 筒井崇史

調査場所 上狛北遺跡 木津川市山城町上狛宝本・西浦代ほか

柳田遺跡 木津川市

山城町椿井柳田

現地調査期間 平成21年10月27日～平成22年2月25日

調査面積 1,000㎡

2. 位置と環境

上狛北遺跡・柳田遺跡の所在する木津川市山城町は京都府南部、木津川の右岸に位置する。両遺跡の周辺は、木津川によって形成された沖積平野が広がっており、現在水田が営まれている。

木津川市山城町には南山城地域を代表する遺跡が多数所在する。以下、両遺跡の周



第1図 上狛北遺跡周辺主要遺跡分布図
(国土地理院 1/50,000 奈良)

辺の山城町域における代表的な遺跡について概観する(第1図)。

山城町域では旧石器時代・縄文時代に属する遺跡はそれほど多くない。しかし、弥生時代になると、中期の湧出宮遺跡、後期の堂ノ上遺跡・椿井遺跡・上狛西遺跡などがある。いずれも竪穴式住居跡が確認されている。

古墳時代になると、三角縁神獣鏡が30面以上出土した椿井大塚山古墳(前方後円墳、全長175m)が築造される。しかし、椿井大塚山古墳を築造したと考えられる集団の集落は今のところ未確認である。また、椿井大塚山古墳に引き続き平尾城山古墳(前方後円墳、全長110m)が築造されるものの、その後は全長100mを越えるような大型前方後円墳は築造されなくなる。中期末には上狛北遺跡の北東の丘陵上に小規模ながら前方後円墳である天竺堂1号墳(全長27m)が営まれる。山城地域では、埋葬施設として横穴式石室を採用したもっとも古い古墳の1つとされる。このほか、後期群集墳として車谷古墳群(総数40基以上)などがある。これに対して、古墳時代の集落はあまり知られておらず、上狛東遺跡では古墳時代前期の土器がまとまって出土しているものの竪穴式住居跡などは未確認である。

飛鳥時代になると、古代寺院の1つである高麗寺が造営される。また、高麗寺伽藍整備期の瓦を焼いた高麗寺瓦窯跡なども確認されている。しかし、この時期の集落は未確認である。なお、高麗寺は中世前期まで存続した可能性が高い。

奈良時代になると、上狛北遺跡周辺は、具体的な遺構は未確認であるが、恭仁京右京推定地とされている。引き続き平安時代・中世も遺物の出土はみられるものの、具体的な遺構が検出された遺跡は少ない。

3. 調査経過

上狛北・柳田両遺跡は、これまで発掘調査が行われたことはなく、調査対象地周辺でも具体的な調査成果が少なく、木津川の旧河道などの存在が予想された。このため、遺跡の全容が十分に明らかになっていないため、まず、遺構・遺物の状況を把握するための確認調査を実施した。

調査は平成21年10月27日から調査地周辺の整備・トレンチ設定に着手し、11月2日から重機による調査区の掘削を行った。

調査は、対象地の南端に位置する第1トレンチから開始し、順次、北に調査区を移動していくこととした。調査区は周辺の水田の状況や畦畔などを考慮して、規模がまちまちであるが、合計10か所のトレンチを設定した(第2図)。このうち第1～6トレンチが上狛北遺跡、第7～10トレンチが柳田遺跡に該当する。

第1トレンチでは調査開始早々、中世の遺物が多数出土し、溝や柱穴などの遺構の存在を確認するに至った。一方、第2・3トレンチでも中世の耕作溝を多数確認するとともに、その下層で南北方向に延びる奈良時代の溝を確認した。

第4～10トレンチは、おおむね同じような土層が堆積をしている。耕作土・床土を除去すると、砂質土・砂層が厚く堆積しており、安定した遺構面を確認することはできなかった。この砂質土・

砂層からは少量ながらも弥生時代から中世にかけての遺物が出土した。砂層より下層の状況を確認するため、重機による断ち割りを行ったが、粘土層が厚く堆積していることを確認したにとどまり、遺構面を確認するには至らなかった。この粘土層からの遺物の出土は認められなかった。

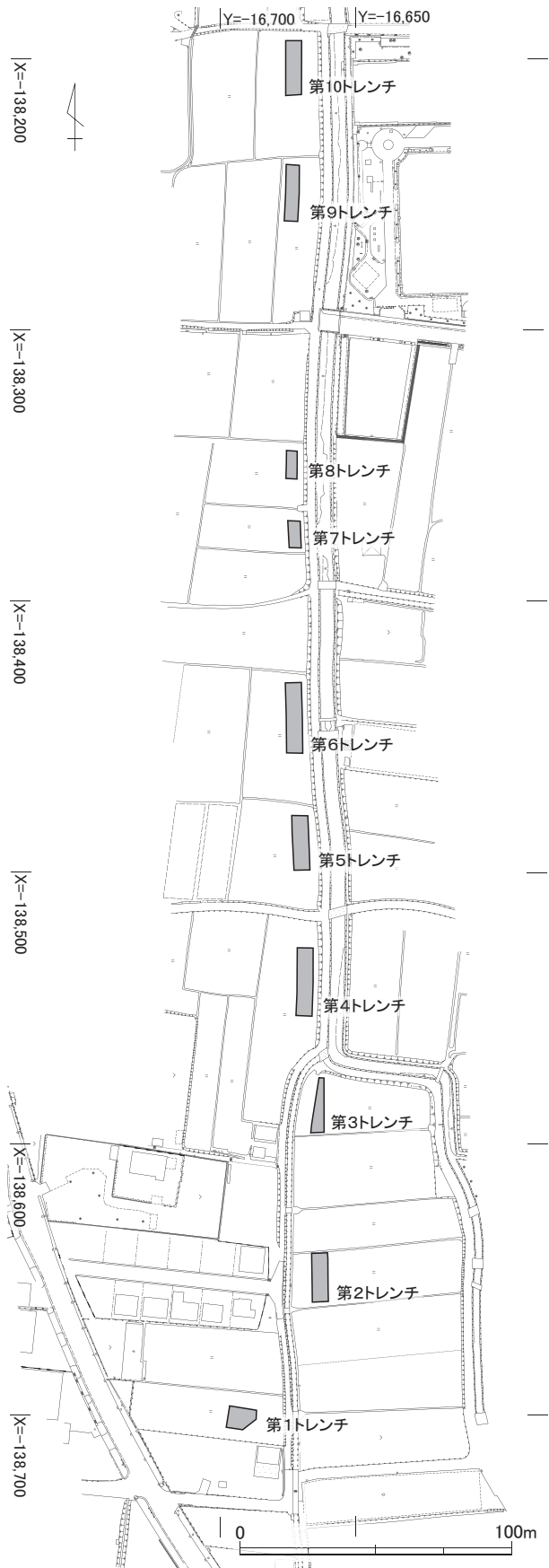
第4～10トレンチについては、以上のような状況のため、重機による掘削後、人力による精査、出土遺物の採集、重機による断ち割り、全景の写真撮影を行い、すべての作業の終了後、安全に配慮して、埋め戻しを行った。

第1～3トレンチは、下層の調査後の平成22年2月9日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。その後、遺物の取り上げ、図面作成等を行い、2月25日にはすべてのトレンチの埋め戻しを終了した。さらにトレンチの周囲に進入防止等のための安全対策と、若干の遺物整理作業を行った後、機材や事務所を撤収し、3月1日にすべての作業を終了した。

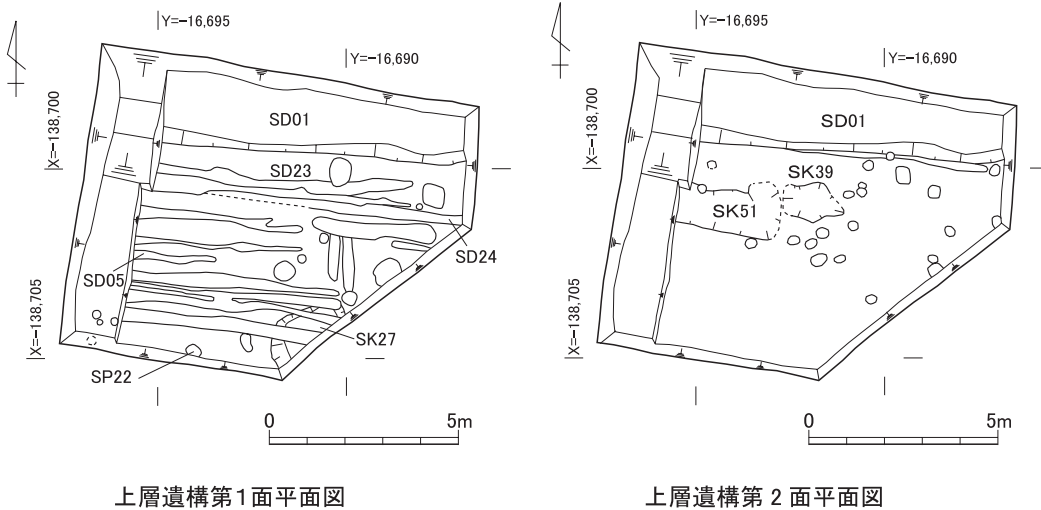
今回の調査で出土した遺物の総量は整理箱にして、15箱である。このうち、第4～10トレンチで出土した遺物は2箱にとどまる。

4. 調査成果

10か所の調査区を設定して調査を行ったところ、第1～3トレンチについては顕著な遺構・遺物とも確認できたため、平成22年度に対象地全体の調査を行うことになった。以下では、第1～3トレンチについては概略を述べるにとどめ、詳細は平成22年度の調査成果と併せて行う。第4～10トレ

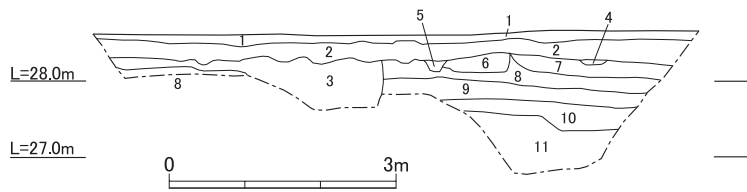


第2図 調査区配置図



上層遺構第1面平面図

上層遺構第2面平面図



- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1: 暗灰色粗砂 | 7: 明灰色細砂ないし砂 (溝SD01埋土) |
| 2: 灰色粘質土 (細砂を含む) | 8: 茶褐色粘質土 (細砂を多く含む) |
| 3: 淡黄茶色砂質土 | 9: 淡茶褐色粘質土 |
| 4: 暗灰色粘質土 (中世の遺構埋土) | 10: 暗灰黄色粘質土 |
| 5: 黒灰色粘質土 (中世の遺構埋土、遺物あり) | 11: 青灰色粘土 (遺物を含まない) |
| 6: 暗茶褐色粘質土 (中世の遺構埋土、遺物あり) | |

西壁土層断面図

第3図 第1トレンチ上層遺構配置・土層断面図

ンチについては調査成果を述べることにする。

第1トレンチ(第3図) 調査対象地のもっとも南に位置する調査区である。平面形は不整形な五角形を呈し、北辺で10mを測る。調査面積は80㎡である。現地地表下約0.5mで遺構面(上層遺構面)を検出した。検出した遺構としては、柱穴30基以上、溝15条、土坑3基などがある。調査区の北辺では、現在の水田畦畔にほぼ平行する幅2m以上の溝SD01がある。SD01の南側には幅15～30cm、深さ5～10cmの溝と直径20～30cm程度の多数の柱穴を検出した。これらの遺構は大きく2時期に分けることができる(上層遺構第1・2面)。第1面は東西方向の溝が多数掘削される段階で、柱穴がほとんどみられない。第1面の溝群を除去すると(5～10cm掘り下げると)、第2面の柱穴や土坑を検出することができた。第2面の柱穴は列状に並ぶものも認められるが、調査範囲が狭いため、建物跡に復原できるかどうかは明らかでない。しかし、柱穴が多数認められることから集落の一面の可能性はある。

以上の上層遺構群は西壁土層断面図の8層上面に相当し、5～7層の遺構が存在する。また、8・9層には少量の遺物を含むことから下層遺構の存在が予想される。

これらの遺構から土師器・瓦器・陶磁器などが出土した(第5図1～10)。1～5は土師器、6～10は瓦器である。1は、いわゆる「て」字状口縁を呈する皿である。2・3・5は、口縁

部外面に2段のヨコナデ調整を施す皿である。2は小型品、3・5は大型品である。4は口縁部外面にヨコナデを施す皿である。6～10は瓦器碗である。6はやや厚手の個体で、口縁部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部内面に沈線を1条施す。内外面とも密にミガキ調整を施すが、見込みに暗文は認められない。外面のミガキ調整に先行して器表面にケズリ調整を施している。高台は断面逆台形を呈する。7～9は底部から内湾気味に立ち上がった後、口縁部がわずかに外反する。内面に密にミガキ調整を施し、外面に粗いミガキを施す。これに先行して成形時のユビオサエの痕跡がみられる。口縁端部内面に沈線を1条施す。8・9は底部を欠損するが、7の高台は断面三角形を呈する。10は底部の破片で、高台の断面形は台形を呈する。内面にミガキ調整を密に施し、見込みには回転数の多い連結輪状の暗文を施す。

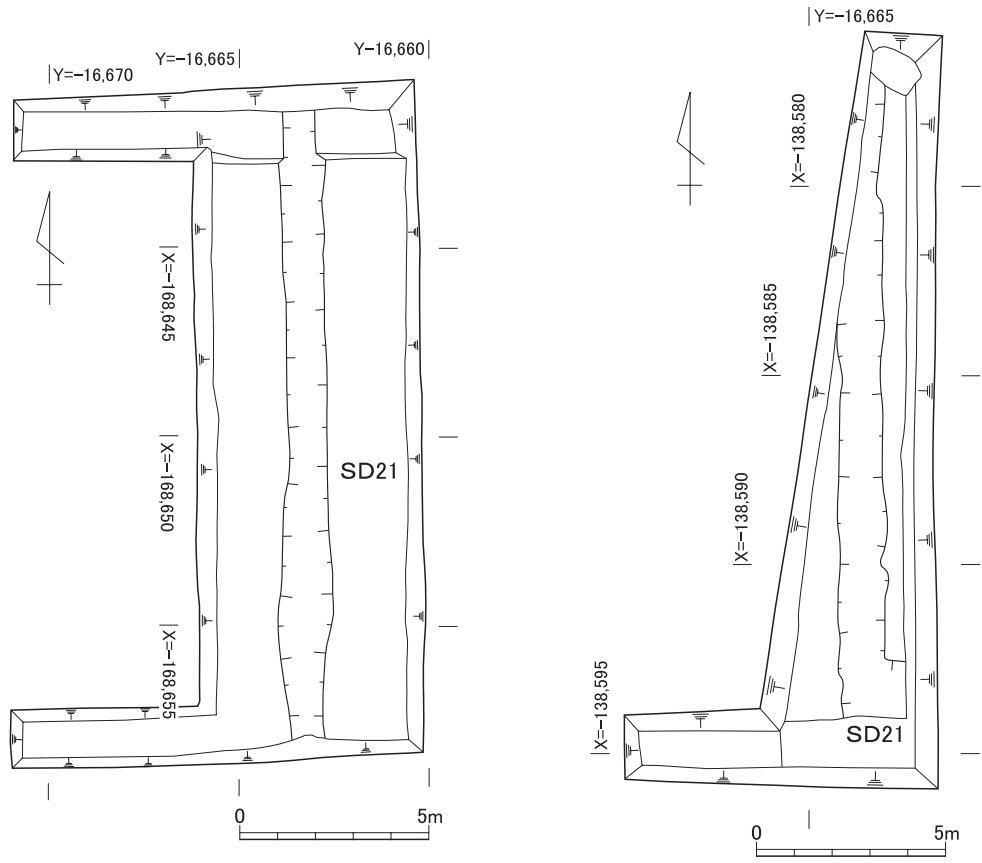
各土器の出土遺構は、1・6が溝SD05、2・4・5・7・8・10が溝SD24、3が溝SD23、9が柱穴SP22である。

第2トレンチ(第4図) 第1トレンチの北東45m位置し、長辺17m、短辺6mを測る。遺構の広がりを確認するための追加トレンチを加えて、調査面積は115㎡である。現地表下約0.6～0.8mで遺構面を検出した(上層遺構面)。遺構としては、耕作に伴うと思われる溝11条を確認した。上層遺構面から10～15cm下げて、下層遺構面を検出した。検出遺構としては、主軸をほぼ南北方向とする溝を1条を検出した(SD21)。溝SD21からは、須恵器や土師器、瓦などが多数出土した。

各遺構面を北壁土層断面図で確認すると、上層遺構面は8層上面に相当し、各溝は4層を埋土とする。5～7・10層の遺構も8層上面から掘り込まれている。下層遺構面は14層上面に相当する。下層遺構包含層は8・9層に相当するが、奈良時代の土器などとともに瓦器碗の破片の出土もみられる。また、14層からは、下層の状況を確認するための断ち割りの際に、古墳時代の土器が出土した。

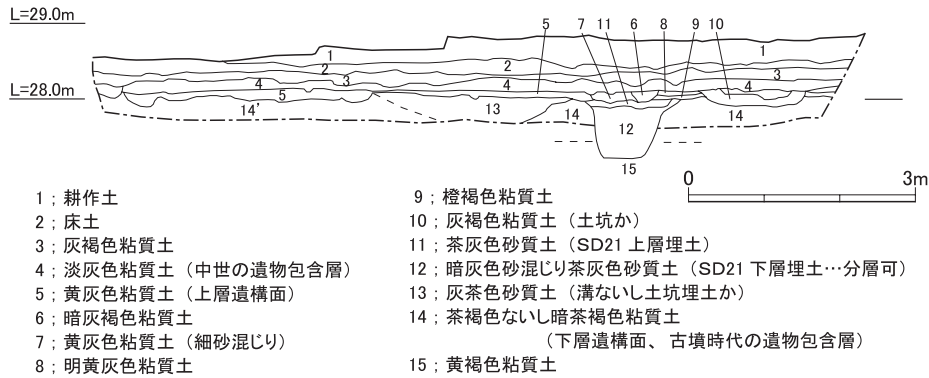
溝SD21は土師器・須恵器・瓦などが多数出土した。ここでは代表的な遺物を報告する(第5図11～24)。11～18は土師器、19～24は須恵器^(注1)である。11は杯B蓋である。外面を4分割したミガキ調整を密に施す。12は杯Aである。13・14は皿Aである。14は内面に斜放射状の暗文を施す。15・16は壺Bである。口縁部にヨコナデ調整、体部外面にユビオサエ、ナデ調整を施す。15の内面はナデ調整、16の内面にはハケ調整を施す。17は高杯の脚部である。脚部外面は面取りを行う。18は甕である。口縁端部内面はつまみ上げ気味に肥厚する。体部外面にハケ調整、体部内面にナデ調整を施す。19・20は杯Aである。21は杯Bである。22は杯Lで、底部から内湾気味に立ち上がって、口縁部が大きく外反する。体部下半から底部にかけての外面に、回転ヘラケズリ調整を施した後に高台を貼り付ける。23は皿Bである。高台の端面は外傾しており、外端部が接地する。24は壺Eである。22と同様に体部下半から底部にかけての外面に、回転ヘラケズリ調整を施した後に高台を貼り付ける。

第3トレンチ(第4図) 第2トレンチの北45mに位置し、長辺20m、短辺のうち南辺は4.5m、北辺は2mを測る。遺構の広がりを確認するための追加トレンチを加えて、調査面積は80㎡であ



第2トレンチ平面図

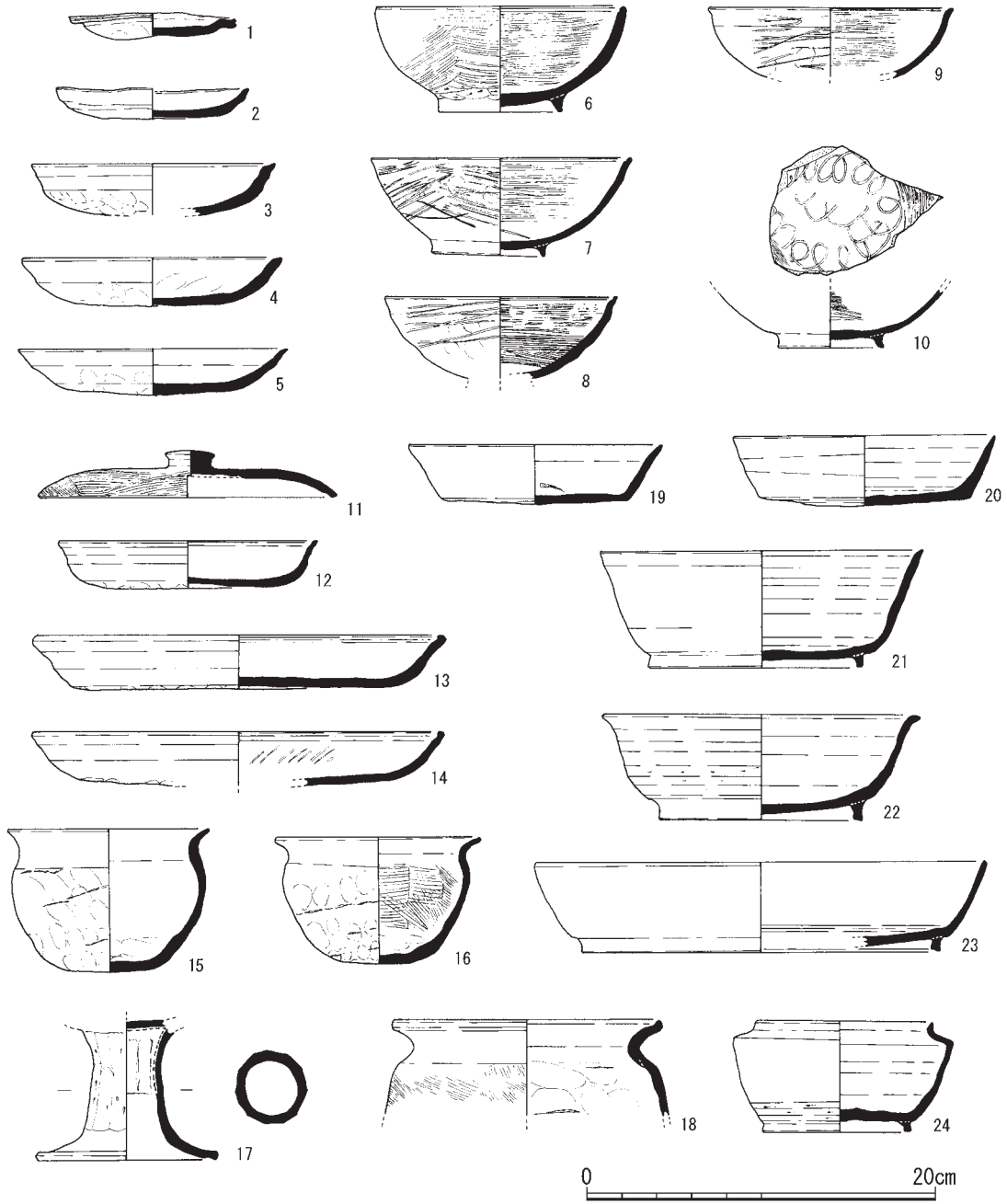
第3トレンチ平面図



第2トレンチ北壁土層断面図

第4図 第2・3トレンチ下層遺構配置・土層断面図

る。調査区の状況は第2トレンチに類似しており、現地表下約0.5～0.6mで遺構面を検出した。遺構としては、耕作に伴うと思われる溝12条を確認した(上層遺構面)。これらの溝からは少量ながらも瓦器・土師器などの土器片が出土した。上層遺構面から約10～15cm下げて、下層遺構面を検出した。検出遺構としては、第2トレンチと同様に、主軸をほぼ南北方向に持つ溝を1条(溝SD21)を検出した。この溝は、第2トレンチで検出した溝SD21の中心座標値Y=-16,663.35に対して、ほぼ同じY=-16,663.50が中心座標値であることから、北への延長上に当たり、一連のものと考えられる。仮に連続する1条の溝であるとすれば、少なくとも総長80mに達すると考えら



第5図 第1・2トレンチ出土遺物実測図

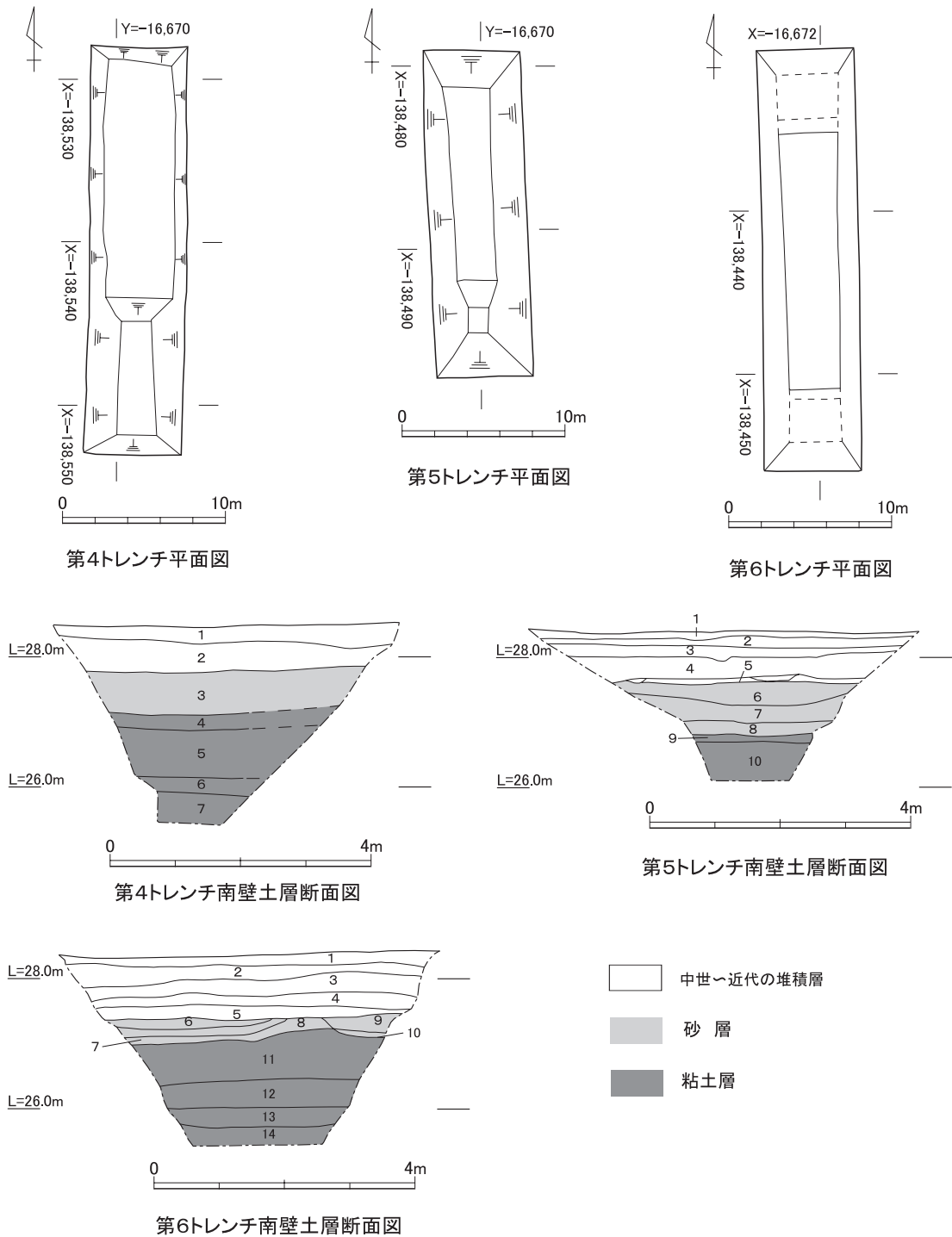
れる。

溝S D21からは奈良時代の土師器・須恵器などが出土したが、実測図の掲載は平成22年度の調査成果と併せて行うので、今回は割愛した。第2トレンチの溝S D21出土の土器類とほぼ同じ時期、同じ内容である。

第2・3トレンチで検出した溝S D21は、奈良時代において南北方向に直線状に延びる溝であることから、公共性の強い施設に伴う区画溝や排水路などの可能性が考えられる。このほか、下層遺構面よりも下層から古墳時代の土器が出土した。

第4トレンチ(第6図) 第3トレンチの北24mに位置し、長辺25m、短辺6m、調査面積150

m²を測る。現地表下約1.8mまで掘削し、砂層の堆積を確認した。砂層を人力で掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。また、調査区の一部で深掘りを実施し、砂層の下には粘土層が厚く堆積している状況を確認した。第4トレンチの堆積状況は、耕作土・床土(1層)、中世～近代の堆積層(2層)、奈良時代の遺物を含む砂層(3層)、遺物を含まない粘土層(4～7層)となる。砂層・粘土層ともにラミナなど、水の流れたような痕跡は認められなかったことから、池状の地形が存在したと考えられる。^(注2)



第6図 第4～6トレンチ平・断面図

出土遺物としては、砂層から土師器・須恵器・瓦器・瓦などが出土した。25～30は土師器、31は須恵器、32は灰釉陶器である。25～27は小破片であるが奈良時代の杯Aである。28～30は口径の復原の困難な甕である。いずれも時期は奈良時代と思われる。31は杯B蓋である。32は碗の底部である。

砂層からは奈良時代の遺物の出土が多いが、瓦器碗の破片も含むことから、中世(12・13世紀頃)の洪水に伴う堆積である可能性が高いと考えられる。

第5トレンチ(第6図) 第4トレンチの北29mに位置し、長辺20m、短辺6m、調査面積120㎡を測る。現地表下約2.0mまで掘削し、土層の堆積状況、遺構の有無の確認を行った。第4トレンチ同様、砂層を確認後、人力で掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。また、調査区の一部で深掘りを実施し、砂層の下に粘土層の堆積を確認した。土層の堆積状況は第4トレンチとおおむね同じである。

遺物は少ないが、砂層から土師器・須恵器・瓦器などが出土した。33は土師器の鉢もしくは碗である。大きく内湾する器形を呈するが、詳しい時期は不明である。34は須恵器杯Aで、奈良時代のものである。なお、粘土層からの出土遺物はない。

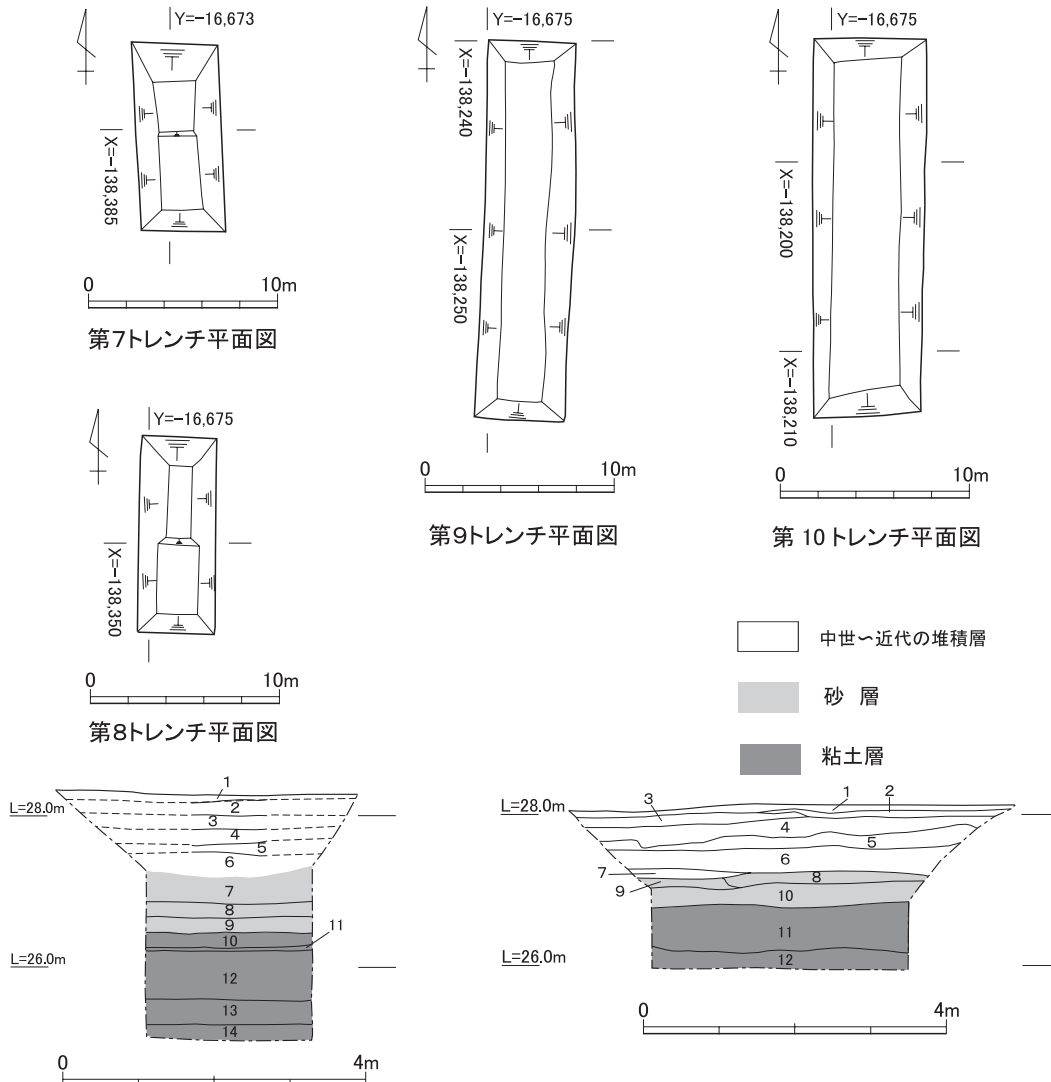
第6トレンチ(第6図) 第5トレンチの北23mに位置し、長辺25m、短辺6m、調査面積150㎡を測る。現地表下約2.0mまで掘削し、土層の堆積状況、遺構の有無の確認を行った。第4・5トレンチ同様砂層を確認後、人力で掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。ただし、調査区の北壁ならびに西壁北半部で、調査区の北西側に広がる落ち込みを確認した(図中の破線の範囲に広がると推定)。落ち込みの上端の標高は27.5m前後である。また、調査区の一部で深掘りを実施し、砂層の下に粘土層の堆積を確認した。土層の堆積状況は、上記落ち込みを除けば、第4トレンチとおおむね同じである。

出土遺物としては、砂層から土師器・須恵器・瓦器などが出土した。35・36・41は須恵器、37～39・42・44は土師器、40は瓦質土器、43は瓦器である。35は杯B蓋、36は杯Aである。37は杯A、38は杯Aもしくは碗Aである。39は甕で、体部内外面にハケ調整を施す。35～39は奈良時代と思われる。41は古墳時代の杯蓋の破片である。40はすり鉢である。内面に摺目が5条確認できる。42は碗もしくは杯である。形態的に瓦器碗に類似するが、酸化焼成で橙褐色を呈する。43は碗の底部である。44は小型の皿である。40・43・44は中世のものである。42は奈良時代のものか中世のものか判断がつかない。

第7トレンチ(第7図) 第6トレンチの北50mに位置し、長辺10m、短辺4.5m、調査面積45㎡を測る。現地表下約1.7mまで掘削し、土層の堆積状況、遺構の有無の確認を行った。第4～6トレンチ同様、砂層を確認後、人力で掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。また、調査区の一部で深掘りを実施し、砂層の下に粘土層の堆積を確認した。

遺物は少ないが、砂層から土師器・須恵器・瓦器などが出土した。46～48は土師器杯A、49は土師器甕で、いずれも奈良時代の土器である。46・48は内面に斜放射状の暗文を施す。

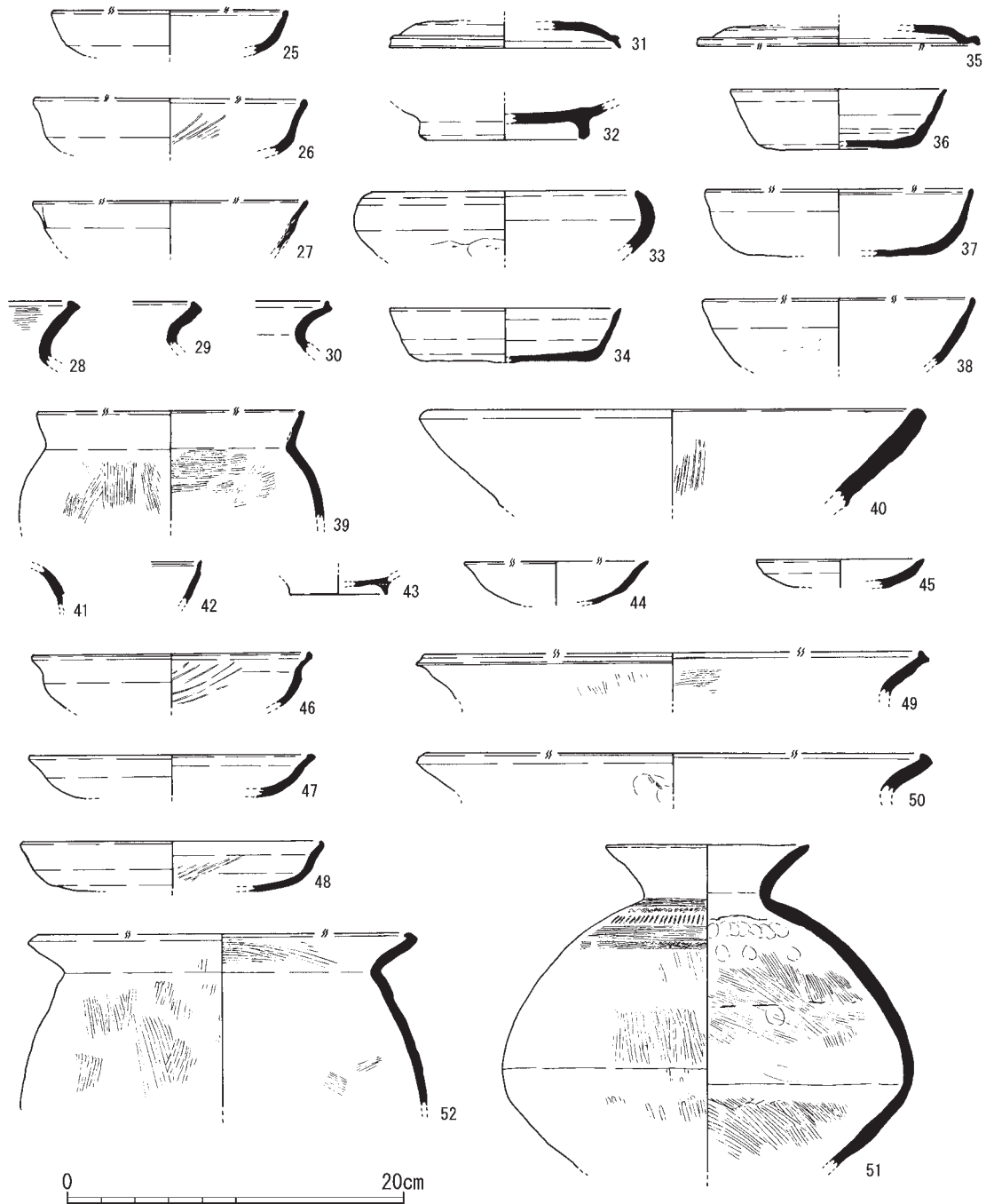
第8トレンチ(第7図) 第7トレンチの北15mに位置し、長辺10m、短辺4m、調査面積40㎡



を測る。現地表下約1.8mまで掘削し、土層の堆積状況、遺構の有無の確認を行った。第4～7トレンチ同様、砂層を確認後、人力で掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。また、調査区の一部で深掘りを実施し、砂層の下に粘土層の堆積を確認した。土層の堆積状況は、耕作土(1層)、床土(2層)、中世～近代の堆積層(3～6層)、遺物を含む砂層(7～9層)、遺物を含まない粘土層(10～14層)である(第7図左下)。

遺物は少ないものの、弥生土器片がややまとまって出土したほか、土師器・須恵器・瓦器などもある。50は土師器甕で、奈良時代のものである。51は広口壺で、弥生時代後期ないし古墳時代初頭ものと考えられる。口縁部は磨滅気味で、特に端部は磨滅が著しい。体部は下半に最大径をもつ玉葱形を呈する。頸部の立ち上がり部から肩部にかけて、上から直線文・刺突文・波状文を施す。なお、実測図は各部の破片から図面上で復原したもので、径や傾きについては必ずしも正確でない部分がある。

第9トレンチ(第7図) 第8トレンチの北83mに位置し、長辺20m、短辺5m、調査面積100㎡を測る。現地表下約2.0mまで掘削し、土層の堆積状況、遺構の有無の確認を行った。第4～



第8図 第4～10トレンチ出土遺物実測図

8トレンチ同様、砂層を確認後、人力で掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。また、調査区の一部で深掘りを実施し、砂層の下に粘土層の堆積を確認した。

出土遺物は非常に少なく、土師器や須恵器の破片が出土したにすぎない。52はやや大型の土師器甕の破片である。口縁部内面と体部外面にハケ調整を施す。奈良時代のものであろう。

第10トレンチ(第7図) 第9トレンチの北26mに位置し、長辺20m、短辺6m、調査面積120㎡を測る。現地表下約2.0mまで掘削し、土層の堆積状況、遺構の有無の確認を行った。第4～9トレンチ同様、砂層を確認後、人力で掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。また、調査区の一部で深掘りを実施し、砂層の下に粘土層の堆積を確認した。土層の堆積状況は、耕作土

(1層)、床土(2・3層)、中世～近代の堆積層(4～7層)、遺物を含む砂層(8～10層)、遺物を含まない粘土層(11・12層)である(第7図右下)。

出土遺物は第9トレンチ同様、非常に少なく、土師器や須恵器の破片が出土したにすぎない。45は土師器皿である。中世のものであろう。

5. まとめ

調査の結果、第1～第3トレンチでは古墳時代・奈良時代・中世の各時期の遺構・遺物を検出した。これらについては、関係機関と協議の上、平成22年度に調査区を拡張して全面的な調査を実施することになった。平成21年度の調査成果の詳細については、平成22年度調査の成果と合わせて改めて報告することにしたい。なお、第1～3トレンチは上狛北遺跡の範囲内に収まる。

一方、第4～10トレンチにかけては、耕作土・床土の下層で、厚い砂層(0.5～0.8m)・粘土層(1.5m以上)の堆積を確認するとともに、砂層から少量の遺物が出土した。この砂層の堆積は、洪水等によって調査地の周辺から流れ込んだものと思われることから、出土遺物も同様と考えられる。また、安定した遺構面も確認できなかった。以上のような調査成果から、第4～10トレンチにかけては、木津川などの旧河道もしくは池状の地形を呈していたと考えられるが、遺物の出土から調査地周辺に遺構・遺物の広がりが見込まれる。

注1 奈良時代の土器の器種分類については、奈良文化財研究所の分類を用いた。

奈良文化財研究所編『平城宮発掘調査報告XVI』(『奈良文化財研究所学報』第70冊)2005ほか

注2 第4・5トレンチの堆積状況については、当調査研究センター理事増田富士雄氏よりご教示を得た。当該調査区周辺が、河川の旧流路などではなく、池状の地形であったことは増田理事の指摘による。

圖 版



(1) 調査地全景(南から)



(2) 第1～3トレンチ全景(真上から：上が西)



(1) 第1トレンチ上層遺構全景
(東から)



(2) 第1トレンチ土層断面(東から)



(3) 第1トレンチ上層溝S D24
遺物出土状況



(1)第1トレンチ作業風景(東から)



(2)第2トレンチ上層遺構全景
(北から)



(3)第2トレンチ作業風景(北から)



(1) 第2トレンチ下層遺構全景
(北から)



(2) 第2トレンチ下層溝S D21
遺物出土状況(東から)



(3) 第2トレンチ下層溝S D21
遺物出土状況(東から)



(1) 第2トレンチ下層溝 S D21
土層断面(北から)



(2) 第3トレンチ上層遺構全景
(南東から)



(3) 第3トレンチ作業風景(南から)



(1) 第3トレンチ下層遺構全景
(西から)



(2) 第3トレンチ下層溝S D21
遺物出土状況



(3) 第4トレンチ調査前状況
(北から)



(1) 第4トレンチ全景(北から)



(2) 第4トレンチ西壁土層断面



(3) 第5トレンチ全景(北から)



(1) 第5トレンチ南端西壁土層断面
(東から)



(2) 第6トレンチ重機掘削作業
(北東から)



(3) 第6トレンチ北壁土層断面
(南から)



(1) 第7トレンチ全景(北から)



(2) 第7トレンチ南壁土層断面
(北から)



(3) 第8トレンチ全景(南から)



(1) 第8トレンチ断ち割り作業
(南西から)



(2) 第9トレンチ全景(南から)



(3) 第9トレンチ北壁土層断面
(南から)



(1) 第9トレンチ作業風景(西から)



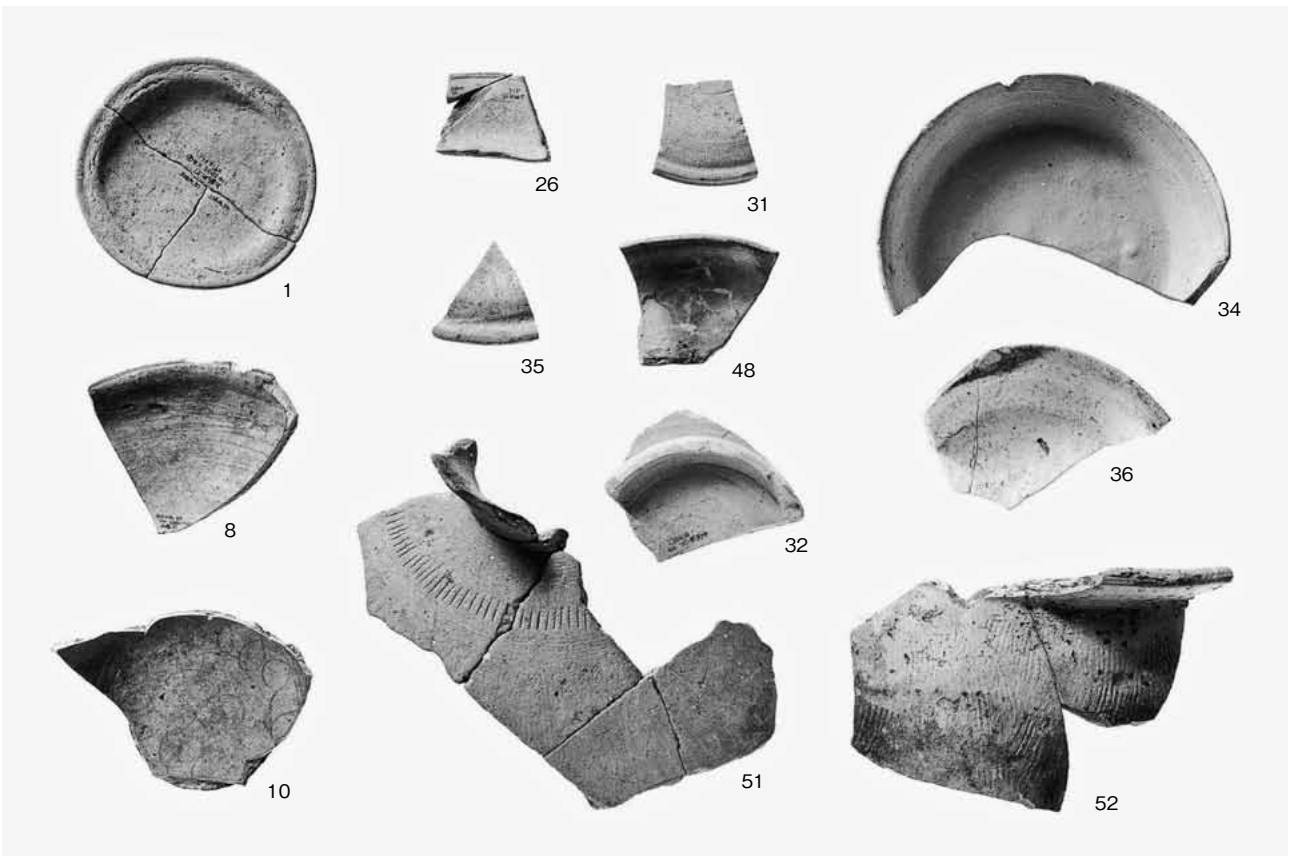
(2) 第10トレンチ全景(南から)



(3) 第10トレンチ北土層断面
(南から)



(1)出土遺物1 (S D21出土土器)



(2)出土遺物2